
コロン～僕を変えた一匹の家族～

リーダー@通りすがりの転校生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コロんゝ僕を変えた一匹の家族ゝ

【Nコード】

N6351Y

【作者名】

リーダー@通りすがりの転校生

【あらすじ】

これは『夢』を持てなかった少年と一匹の子犬の物語。

この1人と1匹の突然の出会いが少年の人生を大きく変える。

プロローグ（前書き）

はじめまして皆さん、リーダー@通りすがりの転校生です。今回が初投稿ということで、表現、話の構成など未熟な点が多く読みづらと思われるかもしれませんが、どうか暖かい目で見守ってあげてもらえると嬉しいです。

プロローグ

目の前には一匹のミニチュアダックスフンドがいた。産まれて間もない子犬だ。手を差し伸べるとヨチヨチと、短い足をしっかりと動かして手の平に登ってくる。その子犬がコロんと手の平で転んで・・・

「ーき！ーずき！和樹ッ！早よ起きんねっ！」

母・里子の怒声が聞こえ、少年は目を覚ました。まだ意識がはつきりとしていないが、とりあえず重たい体を起こす。

「うーん。なんか良い夢だった……あれ？どんな夢だっけ？うむ………」

そう言って夢の内容を思い出そうとすると、

「学校遅刻するよっ！」

またも母の怒声が聞こえ、少年は時計を見ると針が寝過ごしている事を知らせていた。少年は急いで立ち上がり服を着替え始めた。

「やべえ！寝過ごした！急がねーと遅刻するッ！」

そう叫ぶ少年――辻神和樹――彼はまだ知らなかった。これから訪れることになる出会い、そしてその出会いが彼の人生を大きく変え

ていくというごとに……………。

プロローグ（後書き）

どうでしたでしょうか？まずはここまでです。話の流れはある程度まとまってきたので、これからほとんどん続きを書いていこうと思います。次回は登場人物の設定です。

登場人物紹介・その他の設定など（前書き）

とりあえず現段階での登場人物紹介です。

登場人物紹介・その他の設定など

登場人物紹介…現段階での紹介なので、後々でないキャラを紹介していこうと思います。

辻がみかずき
辻神和樹…13歳 男

福岡在住の中学2年生、市内の私立中学に通う。特に何かを目指すわけでもなくとりあえず親からの薦めで中学受験をし燃え尽きている。引っ込み思案な性格だが他人の事を気遣う優しさを持つ。夢が持てないことに深く悩む。

辻がみさとい
辻神里子…39歳 女

和樹の母、他人の前では猫を被るが家出はかなりの尼將軍っぷりを発揮する。かなり短気。

辻がみのぶひこ
辻神信彦…41歳 男

和樹の父、かなり温厚な性格。滅多に怒らないが怒らせるととんでもないことになる。出張することが多い。

コロン

和樹の入学祝いとして辻神家にやってきたミニチュアダックスフンド、コロコロと転がることから和樹によってコロンと命名される。

可愛い（笑）

のもちかずき
野本一樹13歳

和樹の親友、同じマンション、同じ学校、同じ名前で小学校からの付き合い。和樹のことを辻と呼ぶ。

みやもとだいすけ
宮本大介38歳 男

和樹のクラスの担任。教科担当は数学。鬼のように宿題をだす上にテストが難しすぎるということで、生徒からの評判は悪い。和樹の夢が持てないという悩みを心配する。

舞台設定…話の舞台は福岡です。福岡弁や福岡の地名をどんどん出していききたいと思います。

登場人物紹介・その他の設定など（後書き）

とりあえずここまでです（汗）

次回

早速コロンがでてきます！挿絵も入れられたら入れようと思います。
乞うご期待。

第1話 出会い（前書き）

さあ、ようやく1話です！お話を書くのってやっぱり難しいですね
（汗）

多少読みづらくなったかもしれませんが、最後の方はいい感じになってるとおもいます。

それではコロンと和樹の出会い、どうぞお楽しみ下さい。

第1話 出会い

まだ朝日が昇ったばかりの午前6時、いつものように辻神家のインターホンが鳴り、和樹が玄関を開けるとそこには野本和樹がいつものように迎えにきていた。

「辻く早よせんとバス行くばい！」

野本は和樹と同じマンション、同じ階に住み、しかも名前まで同じということもあって、和樹の1番の親友だった。

「早よせんと置いてくぞお！」

また野本の声が聞こえると、

「わかった、わかった。すぐ行く！」

と、和樹はなだめつつ急いで準備を整えた。

和樹と野本は現在バスで1時間ほどの所にある大堀中学校という私立中学に通っている。偏差値は福岡の中学の中では上位にあたる超進学校だが、通学時間が1時間に増えたことは和樹にとっては苦痛以外の何ものでもなかった。

「辻、今日の宿題やった？」

バス停まで歩く途中、野本はいつものように和樹に尋ねてきた。

「やってるけど、お前またやってねーの？」

「いや、昨日はなんかやる気がおきなかったっちゃんね」

「……………もう見せんぞ。」

いつもの頼みを軽くあしらいながら、和樹は今朝の夢の内容を思い出そうとしていた。

（どんな夢だったっけ……………なんか妙に楽しかった気がするんだけど…………）

「和樹！聞いとると？」

そこで和樹の思考は中断させられてしまった。

「うるさいなあ……………聞いとるって。」

「じゃあ何にするとよ、進路。」

「え？」

「ほらーやっぱり聞いてなかった。クソ宮本が言っとったやろ？まあ授業潰れるのは嬉しいけど。」

「進路……………ねえ。」

和樹はため息をつくかのように吐き出した。

和樹には今、1つの悩みがある。それは『夢』がないこと、というよりも、自分からこうしたい！と強く望むことがないことであった。

中学受験をしたのも両親がしておけというからただけだし、実際学校での成績は良い方で、周りの先生からの評価もよくなった。しかし、それも結局は望んでいたことではなく、これから先はどうしたい？と問われると、きっぱりと答えられるような答がないのである。

「うーん……………」

（夢ったってなあ……………）

和樹が野本にどう返そうか、と悩んでいる内にバスがきた。相変わらずの満員である。この満員バスも和樹の苦痛の内の1つであった。和樹達が住んでいるのは市内から少し離れた所でバスの本数が非常に少ない場所なのである。だから、1本のバスに乗る乗客量がハンパではないのである。しかも1番混み合うのは朝のこの時間帯だった。

「えーまた席なかやん。」

と、野本が定番となったセリフを放つ。

「いつものことだろ。それよりほら。」

それを軽くあしらいながら和樹は野本に宿題を手渡す。

「お？いいねえーさすが辻っ！」

「わかったから早く静かにしなさい。」

次のバス停で乗客が降り席があくと、宿題を渡すやいなや野本はす

ぐに席をとり、自分のノートに写し出した。揺れるバスの中では字もまともに書けないだろうに、と思いながら隣に座ると和樹はまた眠る態勢を整えた。このバスの中での睡眠が朝の不足している睡眠量を補う良い機会だった。

（同じ夢が見れますように……。）

そう念じながら、和樹はあっさりと眠りに落ちた。

大堀中学校

バスを降りて野本と別れると、和樹は自分の教室、212までたどり着き、早速授業の準備を始めた。1限目は数学、生徒からの評判は悪いが授業は面白い、そして2組の担任でもある宮本大介の授業だった。しかし、今日はいつもとは違い、宮本は教科書を持っておらずたくさんのプリントを抱えていた。

「今日は授業時間を使ってSHRをやろうと思う。」

その瞬間教室の後ろから歓声が上がった。クラスのボス藤田大輝である。藤田はケンカが強く、ガキ大将という言葉がよく似合うほど大胆な性格だが、成績は学年1位という天才でもあるため、自然と2組のボスとなったのである。

「藤田！授業じゃないが今からやるのは大事な事だからしっかりと話を聞いておくように！」

宮本は慣れきっているのか、冷静に注意をただけでこれを鎮めてしまった。この辺りを見るとやはりこの人はベテランなんだなあ、

と和樹は思いしらされた。

「今日は突然だが、皆にこれからの進路について書いてもらおう。皆も来年は受験生だ。将来への目標があるやつとないやつとでは、成績にも大きな違いがでてくる。しっかりと考えて書くように。」

と言いながら宮本はプリントを配りだした。プリントには将来の目標と書かれており、その下には広々とスペースがとってあった。

「何を書いても構わない。だからと言ってふざけた答えを書くやつは居残りだからな。」

宮本が釘を刺すやいなや一斉にシャーペンの音が教室内に響いた。この辺の切り替えの速さは受験生だったころの賜物だろう。しかし、和樹はシャーペンを持つ手を動かさないでいた。

（進路ったってなあ……………まあ適当に書いとくか）

悩んでも仕方ない。そう自分に言い聞かせた和樹は、とりあえず文句をつけられないような答えをプリントに書き込んでおいた。

（俺にも夢……………できるのかな？）

その問いに反応するかのようにチャイムが鳴り、1限目が終了した。

辻神宅

「ただいまあ。」

授業が終わり、帰宅すると、

「おかえり。」

里子が既に帰ってきていた。

「なんか今日は早かね。」

「今日は和樹の入学祝いが届くとよ！」

そういう里子はどこか楽しそうだ。

（なんで俺へのお祝いなのに喜んでんだよ。）

そう思いつつも遅めの入学祝いについて少し考えてみた。

（Wiiかな？前欲しいって言ってたし。あ、PSPとかかな？今さらになって入学祝いってことはきつと豪華な……）

あれこれ考えている内に和樹の想像は止まらなくなってきた。

「父さんが持って帰ってくるはずだから、それまで宿題と予習やるときい。」

「とつつあんが持ってくるのか、わかった。」

と返しながら、和樹は自分の部屋に戻ると急いで宿題に取りかかった。勉強に集中するときほど時間の経過は早くなるという性質を活かす算段だ。

（早く帰ってこいよとつつあん。）

和樹は心なしかペンを動かす手が早いような気がした。

午後9時

「ただいまあ。」

父・信彦の帰宅である。

「おかえりい！」

里子よりも早く和樹が反応した。

「おう！和樹！今日はお前にプレゼントが……………」

「知ってる！」

信彦の言葉を遮り和樹の視線は信彦の持つ大きな箱に釘付けになった。

「ねえ！これなに？Wii？Xbox？」

すると信彦は笑いながら、

「そんなものよりもっと良いものだ。昔お前が欲しい欲しいって言うってたものだぞ。」

「？」

「まあ、とりあえず開けてみい。」

和樹は期待を胸に箱を開けた。

「え？」

そこに居たのは和樹のどの予想にも当てはまらないものだった。

「い……………犬う？」

そこには小さなミニチュアダックスフンドが丸まってスヤスヤと眠っていた。

「え？ちょ……………なんで？」

和樹は目の前の光景が信じられなかった。

「なんで？ってお前が前に飼いたいって言っとったやんか。」

信彦が言っているのは、ある日《今日のわんこ》で流れていたミニチュアダックスフンドを見ている和樹が唐突に言ったセリフ。

『とっつあん、俺犬が飼いたい。』

『お前簡単にいうばってん、犬飼うのは色々大変とよ？』

『世話俺がやるけんさ。』

『まあ気が向いたらな。』

当の和樹はそんなやりとりがあつた事などすっかり忘れており、

「まさか犬とは……………」

驚きを隠せないでいた。すると箱の中の子犬はその声で目が覚めたのか、ゆっくりと伸びをすると、自力で起き上がり、ゆっくりとゆっくりと和樹の方に向かって歩いてきた。

「お？こいつ和樹の事好いとかね？和樹抱いてやり。」

信彦が笑いながら和樹に進める。

「抱いてやれっただって……………」

「手の平に乗せるぐらいでいいけん、ほら。」

和樹は恐る恐る手を差し伸べてみると、子犬はその手の上に短い足をヨチヨチと動かしてゆっくりと登ってきた。その黒い毛並みはフカフカとしており、眉の辺りは茶色のマロ眉で、またその体は出来上がっていないのか、とても柔らかく崩れてしまいそうだった。しかし、何よりも和樹を驚かせたのはその暖かさだった。その小さな体から発せられる熱は手の平通してゆっくり、そしてじんわりと和樹の中に伝わっていた。

「暖かい……………」

手の平でコロんと転ぶ子犬を眺めながら、和樹はそう呟いた。

「名前ば決めてやりいよ、和樹。」

その光景を見ていた里子が和樹に提案した。

「うーん。名前、名前……。」

和樹が考えていると、またも手の中の子犬はコロんとこけていた。その光景が和樹にはなんとも可愛らしく写った。

「……………コロん。」

「「え？」」

両親が同時に聞き返す。

「コロんって転がるからコロん。こいつの名前はコロんだ。いいでしょう？」

「コロん……かあ。まあいい名前っちゃない。」

「ネーミングセンス無い和樹にしてはいい名前やん。」

両親ともに笑いながらも賛同することに変わりはないようだ。

「よし、今日からお前はコロんだ。よろしくな！コロん！」

そう言うと、コロんはまるでそこ呼びかけに反応するかのように和樹の方を向き、チロチロとその手を舐めた。和樹の手に包まれながらもコロんは確かにその生命の温もりを和樹に伝えていた。

第1話 出会い（後書き）

どうでしたか？そろそろ私の構成も無茶苦茶になってきました（笑）
コロンのところの描写は特に気合い入れてるので少しはまともにな
ってると思います。

さて、次回はコロンを迎えた和樹の新しい生活が始まります。お楽
しみに？

第2話 変化（前書き）

更新遅くなりました（汗）2話目です＼（／＼▽／＼）やっぱり方
言って難しいですよね……でもこの方言はこういう意味なんだろう？
って考えながら読むのも楽しみの1つだと思っんでこれからも入れ
ていこうと思います。この機会に福岡に興味を持っていただけると
嬉しいです！それでは第2話どうぞ（へーへ）／

第2話 変化

午前6時いつもの通り和樹は目を覚ましリビングに向かった。いつもの通り父と母は仕事に向かい、家には1人………のはずだった。しかし、和樹の目の前には一匹の子犬がリビングを走り回るといふ光景が写っていた。

「おはよう。昨日は眠れたか？」

返事がくるわけないとわかりつつも和樹は目の前の子犬Ⅱコロンの話しかけると、コロンはパツと和樹の方を振り向き、和樹目掛けて一気に走ってきた。

「うお！………本当に飼ってるんだな………犬。」

和樹は未だに自分が目の前にいる子犬の飼い主なったという実感がわかなかった。どうやら餌は母が置いていてってくれたらしい。父がゲージやオモチャなど様々なものを買ってきたおかげで、コロンの生活用品は完備されていた。

「ああゝそろそろ準備しないと野本のもがくるな。」

和樹が登校の準備に取り掛かろうと立ち上がると、それについて行くようにコロンも後ろ歩く。

「本当なら散歩とか連れて行ってやりたいんだけどな。」

母が言うにはコロンは子犬が受けなければならないワクチンを摂取したばかりで2週間ほどは外出禁止らしい。しかし、部屋中を走り

回る姿を見るだけで和樹は何か胸がじんわりとほぐれる。そんな気持ちになった。

一通りの準備が終わると、

ーピンポーンー

とチャイムがなるのが聞こえた。

「はい、はいはい………」

そう言いながら玄関を開けるとそこにはやはり野本の姿があった。

「おっす！」

そして定番の挨拶である。

「おう！さあ、早く行こうぜ！」

それに対して和樹が返事をする、

「？………どうしたん？なんかあったと？」

野本は不思議でたまらないといった様子で和樹に尋ねた。

「え？なにが？」

「いや、いつもの辻ならもっとサラッと受け流すのに珍しくちゃんと応えるからさ。」

言われてみれば、今日はなんだか気分がいい。

「まあな。ちょっと色々あってな。」

と和樹はニヤけながら応じる。

「なんだよお？」

野本は気になってしょうがないといった様子だ。

「実はな……犬飼ってるんだな、これが。」

「マジで？見してよ。」

「まだ無理だから今度な。」

「えー。じゃあ今度な、絶対ばい。」

「わかった、わかった。」

そう応えながら2人はバス停へと歩きだした。

大堀中学校

和樹の頭の中はコロンのことでもいいだった。手には昨日の温もりが未だに残っている。あの温もりがいつも近くにいる。そう思えるだけで和樹はとても幸せな気分になっていた。

（今日は帰ってからどうしよう………とりあえずナデナデして………それから………）

「ーみ。ーじがみ！辻神！」

「は、はいい！！！！！！！！！！」

宮本の呼びかけに気づいて、ハッと周囲を見渡すとクラスメートの嘲笑の視線が和樹に突き刺さっていた。その中に長伊雄一郎の姿があり、和樹は少し苛立ちを覚えた。

長伊雄一郎、『長伊』とつく割には身長は158cmしかなく、また顔がインテルの長友に似ていることから周囲からインテルと呼ばれていた。常にヘラヘラしており、和樹に言わせればただのアホであった。そんな長伊に笑われるというのはなんとも屈辱的だった。

その後、宮本に質問に答えられなかった和樹は自分の迂闊さにガツクリし、その後の授業も身が入らなくなってしまった。

（あーイライラする。あー気持ち悪。まあいいや、部活で発散するか。）

放課後、まだ誰もきていない体育館で和樹は1人ネットを張っていた。和樹はバトミントン部に所属しており、終齢が終わるといつも誰よりも早く準備を始めていた。

「ああー先輩達遅いなあ……。」

「本当やな〜。」

「うわっ！」

和樹の隣には何時の間に来たのか野本がいた。ちなみに野本もバトミントン部である。

「急にでてくんなよ、気色悪い。」

「ごめん、ごめん。そんなこと言うなよ。」

野本は苦笑いを浮かべながら謝罪を入れる。

「にしても本当に遅いなあ。」

そう言いながら2人がウォーミングアップを始めようとすると。

「ああゝめんごめんご、遅くなったわゝ。」

声の聞こえる方を見ると、そこにはバトミントン部最強の男、清麻呂きんろがいた。

「芳樹先輩何してたんすか？」

「いやあゝカロリーメイト食った。」

「でもお菓子の持ち込みは禁止じゃ……………」

「小さいことを気にしてたらいつまでたっても強くはなれんぞ？」

「……………」

あまりにも素早い切り返しに和樹は言葉を失ってしまった。そんな調子で練習が終わると、

「あ、そういえばGODは犬飼ったとよね？」

芳樹は辻神の神をとってGODと呼ぶが和樹はそれを嫌がっていた。

「先輩、GODはやめてください。てか、なんで知ってるんすか？」

「野本から聞いた。」

何故かどや顔で応じる芳樹。

（またあいつはペラペラと話しやがって……………。）

「GOD、愛犬との時間は大切にしろよ。」

「？」

「俺も昔飼ったよ、犬。」

「マジっすか？」

「大マジたい。なかなか時間なくて一緒にいてやれなかったっちゃね。そうなると後々本当に後悔するからな。今を大事にするんが1番よ。」

「でも、まだ産まれたばかりですよ？」

と和樹は笑いながら応じる。

「馬鹿だなあ……………産まれたばかりだからこそ大事になってくる

とよ。」

芳樹はまるでわかってないと言いたそうに和樹を見ていた。

午後8時・辻神宅

「ただいまあ。」

和樹が帰宅すると、リビングの方からクウーンと鳴き声が聞こえてきた。

「ただいま、コロン。」

そう言ってコロンをゲージから出すと、一気に和樹に飛びかかってきた。

「うお！わかった、わかったから落ち着きなさい。」

となだめようとするがコロンにそれがわかるわけでもなく、和樹はひたすらコロンになされるがままとなっていた。

「ふう〜びつくりした。それにしても犬なのに『ワン』って泣かないんだな。」

そう。産まれたばかりの子犬は声帯が発達しておらず我々が聞き慣れているような鳴き声を出せないのだ。

「でもこっちの方が可愛いよな……………」

まだ2日しか経っていないにも関わらず、既にコロンは和樹に慣れ

きっていた。和樹がソファに座るとヨチヨチと側まで寄ってきて、まるで乗せろと言わんばかりに鳴くのである。そっと抱き上げると、そのままコロンは和樹の脚の上でクルッと丸まり寝るのである。

（可愛かあ……………いつまでもこうしていたいな……………。）

そう思っていると、芳樹に言われた言葉が脳裏を駆け巡った。

「今を大事に……………か。別れる日なんて本当にくるのかな？」

あり得ないとは思いつつも、もしそうになったら……………と考え始めそうになった和樹は、コロンをひたすら撫でまくり気にしないように努力した。

「そういえば家に1人でいないなんて初めてだな……………」

コロンの頭を撫でながら和樹はそう呟いた。両親共働きの辻神家はどちらとも帰宅時間が遅く、基本的に家には和樹1人だった。そのため1人でTVを見るのが当たり前だった和樹にとって、両親以外の何かと家で過ごすというのは大変珍しいことだった。

「よし！今日は宿題早めに終わらせて一緒に寝るばい！」

和樹が今のコロンとやりたいこと。それは一緒に寝ることだった。

風呂から上がり、コロンを抱えてベッドに半身になって寝転ぶとコロンはまるでわかっていたかのように毛布の中に潜り込み、和樹のお腹の当たりでクルッと丸くなり毛布から顔を少し出した状態でこちらを見た。その光景に癒された和樹はゆっくりと眠りに落ちた。

こうして和樹とコロンの新たな生活が始まった。

第2話 変化（後書き）

2話目終了です。今回は少し短めになってしまいました。しばらくは和樹の学校生活を中心とした話になってしまうと思いますが、ちゃんとコロンはでてきます！また学校生活ででてくる色んなキャラクターのことも楽しんで読んでもらえると嬉しいです。

次回はコロンが内にきてから初めての休日。和樹はどう過ごすのでしょうか？それでは次回もお楽しみに（＾－＾）／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6351y/>

コロン～僕を変えた一匹の家族～

2011年11月21日12時10分発行